

クサギカメムシ

カメムシ目カメムシ科に属し、クサギ（臭木）によくいることから命名されました。日本、朝鮮半島、中国、台湾等の東アジア原産でしたが、近年はアメリカ、カナダ、ヨーロッパに分布域を拡大しています。広食性で寄生植物は27科51種以上に及び、古くから果樹や豆類の吸汁害虫として知られてきました。生息域が広域で、様々な植物を吸汁し季節ごとに移動しながら繁殖するなど、生態が不明な点もあります。また、冬季が寒冷な地域では、越冬のために屋内に侵入し、刺激を感じると強い悪臭を放つ衛生害虫でもあります。本虫の英名はBrown marmorated stink bug（直訳すると褐色大理石模様の臭い虫）。ところで、本年の2月にニュージーランドのオークランド港に入港した日本の自動車運搬船で大量のクサギカメムシが発見され、ニュージーランド政府は自動車の荷降ろしを許可せず、国外退去を命じました。このため海運会社は目視点検業務を開始し、オーストラリア等の近隣の地域で駆除を検討するなど、本虫が自動車輸出の非関税障壁にもなりかねません。

1. 形態・生態

(1) 成虫

体長は約15mm、暗褐色の地に不規則な茶褐色の斑紋があり、赤褐色を帯びる個体もあります。

発生は年1回で、暖地では一部2回発生する事があります。

4月頃に越冬場所を離脱し、あちこち飛び回り様々な植物に付いて吸汁し（人に例えると、食べ歩き）、8月頃まで生存します。雌は5月下旬頃より間欠的に交尾と産卵を繰り返し、ピークは6月中旬～7月上旬で、卵は飼育中で28個程固めて葉裏に産み付けます。

8月頃に羽化した新成虫は生殖休眠のため交尾することなく、次第に越冬場所付近へと移動します（人に例えると、物件探し）。気温の低下と共に、樹皮の隙間、落葉中、積み重ねた木材、石の割れ目等、物と物の間の狭く暗い場所や家屋等に潜入して越冬します。



(2) 幼虫

様々な植物に発生しますが、卵が次世代の成虫まで成長できる寄主植物は少なく、雑木林ではキリ（岩手県）、ウワミズザクラ（秋田県）畑地ではリンゴ（秋田県）が報告されています。

1齢幼虫は腹部が赤く、摂食せず卵塊の周辺に集団で留まっています。2齢幼虫は全身が黒色に変わり、足が長くなり摂食を始めます。3齢幼虫は腹部が横に大きくなり、鮮明な模様が現れ形態が大きく変化します。4齢になると胸部に翅の原基が現れます。5齢（終齢）になると翅の原基が腹部にはみ出し、色彩も成虫に近くなります。

卵から5齢幼虫を経て成虫までの期間は、24℃の恒温条件で44.5日を要します（長野県）。



1 齢幼虫

2. 近年の発生状況

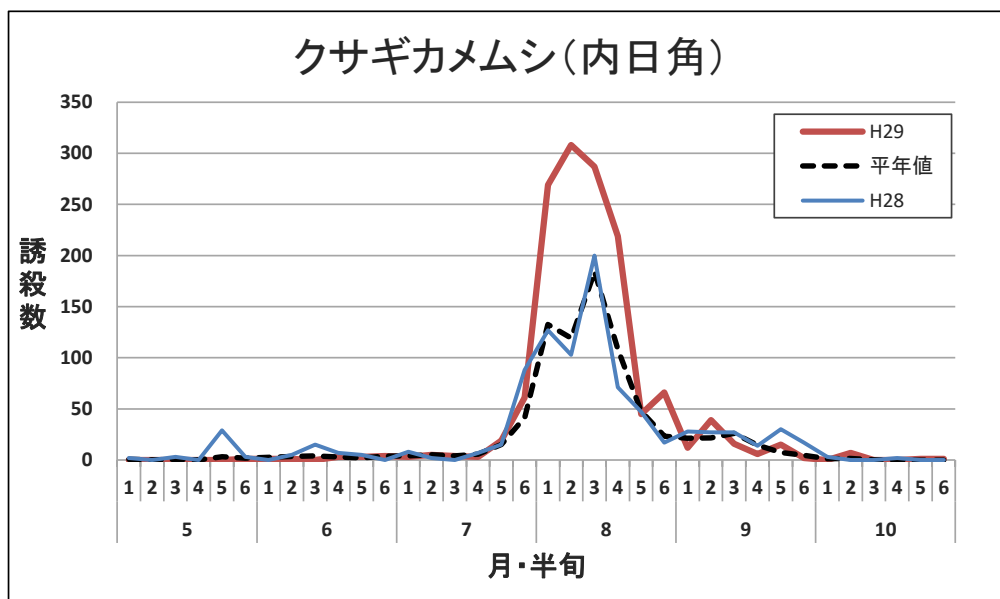


図 クサギカメムシの予察灯（100W水銀灯）への誘殺状況

病害虫防除室では、かほく市内日角に予察灯を設置し誘殺消長を調査しています。

予察灯への飛来は、新成虫が羽化する8月に急増します。

今年度は1,401頭誘殺され、平年より70%程多くH25年に次いで高い数値でした。

3. 被害

果樹、豆類、野菜類等、多くの作物に被害を及ぼします。4月頃から越冬成虫、8月頃から新成虫が飛来し、新芽や茎葉、果実など植物の様々な場所に口針を挿して吸汁します。

- ①ウメ 幼果やコウメは落下し、成熟期では吸汁部分に壊死や奇形が発生します。
- ②モモ 幼果期は落下し、成熟期では吸汁部分が腐敗します。
- ③ナシ 幼果期～成熟期にかけて、吸汁部分が変形、壊死、腐敗します。
- ④リンゴ 幼果期～成熟期にかけて、吸汁部分が変形、壊死、腐敗します。また、幼果期に種子を吸汁されると落下します。
- ⑤カキ 花蕾、幼果は落下し、成熟期では吸汁部分が壊死、腐敗します。
- ⑥カンキツ 新梢の枯死、花蕾、幼果の落下、成熟期では吸汁部分が壊死、腐敗します。
- ⑦ブドウ 収穫期頃に吸汁されると、腐敗、かびが発生します。
- ⑧豆類 開花時期は着莢数の減少、莢伸長期は莢の扁平化、青立ち、子実肥大期では莢の奇形、子実の奇形、しわ、変色が発生します。
- ⑨キュウリ くぼみ、曲がり、内部には空洞が発生します。

4. 防除

飛来性の害虫なので防除可能な時期は、ほ場侵入時に限られます。

例えば、新潟県のカキにおいては、①アーデント水和剤、ダントツ水溶剤、テルスター水和剤、アルバリン・スタークル水溶剤で防除効果が高く、10日以上残効が期待できること、②多発時に果実被害を抑えるには、通常10日以上間隔をあけずに薬剤散布する必要があるが、残効期間の長いアーデント水和剤、ダントツ水溶剤は散布間隔を2週間程度にすることができることが報告されています。